

て信用の創造をはかるローの「システム」には断じて同意できなかった。彼はその一点に向けて『商業試論』を物したとさえ思われる。さきに述べたローの減価と増価の併用策についても、彼はそれに類する歴史の事例をあげ、『商業試論』に一章を設けて、これを批判した。彼はこのただ恣意的な貨幣操作のなかに「システム」の本質をみていたのであろうか。しかしながら、もっぱら金属貨幣の「内在価値」にこだわるカンティロンの「システム」批判はローの信用創造の原理の革新性に対応しきれない彼自身の理論的限界を示すものでもあった。これに対してムロンが増価政策を肯定し、またさらに増価政策を信用創造の政策へと転換すべき必要性と可能性とを論じて、カンティロンの対極に立ったことは、すでにみたとおりでである。しかし増税手段としても経済の活性化の手段としても、彼が最終的に増価政策を破棄すべしとしたかどうかは定かではない。どこまでもつきまとい、『政治的試論』を制約する増価論である。

さて、以上が『政治的試論』の初版の側からみた『商業試論』との主要な対立点とその問題である。『政治的試論』が基本的には「立法者」と「奢侈」と「信用」とで構成されていることは明らかだが、比較的体系的な『商業試論』全編に比べれば、これらの三点はそれぞれ、いわばトピックスを追うような形で合成されているだけで、全体としての有機的構成に欠けることもまた明らかである。立法者はいかにして、その公正を確保しうるのか、奢侈と信用はどのように結合されうるのか、等々、要するに、国民経済としての拮据のなかで、これら三点はどのような理論的政策的連関を持ちうるのかが、なお問われるべき問題であった。ムロンはこの「欠落」を埋めるべく、1736年に七章を増補して「新版」とし、これによって『政治的試論』の再構成をはかったのである。カンティロンの死の直後のことであった。 (未完)

(富山国際大学教授)

## スヴァーリン文庫のなかのトルストイ Bernstein-Souvarine Collection and Tolstoi

関 啓 子  
SEKI Keiko

肖像画家として有名なレーピンは、トルストイと親交があつかったことでも知られている。レーピンは、ヤースナヤ・ポリャーナにトルストイを訪ね、かれの肖像画を描いている。その中には傑作と言われるものが含まれているが、私がここで触れたいのは、1887年作の「耕作するトルストイ」(トレチャコフ美術館)である。背景の処理など、門外漢の私にさえやや難があると感じられる作品だが、トルストイによって生きられた思想が一枚の絵となっているように思えてならない。その作品は、広大なロシアの大地を、二頭の白馬と耕すトルストイ像である。かれは農民の野良着をまとい、胸のボタンははずれ、顎髭は風にたなびいている。思いつめたかのようなかれの表情と小首を傾げた馬の穏やかな表情とがひとつのコントラストを醸し出している。

スヴァーリン文庫に、あるテーマのための資料を検索していた私は、総目録のトルストイと

いう綴りにひかれてかれの作品を手にする事となった。『コーカサスのとりこ』『人は何で生きるか』などのトルストイの何点かの初版本のページをめくり、昔の綴りそのままの文章を目で楽しむうちに、もう一度、トルストイのこだわりを確認したいというおもいに駆られた。トルストイと向き合うのは、三度目になろうか。一度目は、直接的にトルストイの教育思想を分析した（「トルストイの自由教育論をめぐる」『一橋論叢』76-3, 1976年）。二度目は、クループスカヤ研究を進める中で、彼女にもっとも大きな影響を与えたロシアの教育思想家としてのトルストイと向き合った（『全面発達と人間の解放』明治図書, 1985年）。そして今回が三度目である。スヴァーリン文庫の内の文献でトルストイのこだわりを確認し、クループスカヤがそのこだわりを共有していたかどうかを吟味してみるという関心をそそられた。

トルストイの切っ先鋭い社会批判は、多くの研究者に、トルストイと革命運動各派の論者との関係の解明という関心を喚起するのに十分であった。社会科学的関心をもつ人々の多くは、人間の問題よりも、社会批判と社会変革に関心を傾斜させ、トルストイを論じてきた。この場合、大抵、ローザ・ルクセンブルクに見られるように、トルストイには労働運動への理解が欠如していたという指摘が引き出されることとなる。

これでは語り尽くせないトルストイがいる。人間存在のあり方を第一とし、社会問題は第二義的であるとするトルストイである（参照；エルヴィン・オーバーレンダー『レフ・トルストイと革命運動』1965年、法橋和彦訳、1990年、大阪外国語大学学術研究双書1）。トルストイにとって問題なのは、どう生きるかであり、どのような社会を造るかではない。しかし、どう生きるかという問いに妥協せず、自身の行為によって答えれば、社会をある方向に向けることを選択することになる。結果としての社会改革とでも言えようか。

人間存在のあり方に沈潜するなかで、トルストイの思想に魅かれた人もいる。そうした人の一人が、クループスカヤであった。クループスカヤがトルストイに魅了された最初の契機は、かれの小説にあったが、トルストイに手紙を書き、直接的に働きかけることとなったのは、労働する人々に対する負債感からの解放の希求であった。青年期の彼女は、自らが存在し続けることができるのは、労働する人々の存在のおかげでありながら、かれらに支えられて身につけた知識がこれら民衆のための役に立たないことに焦りを感じていた。一体どうしたらかれらに対する負債感を解消できるのか。この無力感と焦燥感に苛まれ、彼女はトルストイに手紙をしたためた。だが、彼女のこの焦りと葛藤こそまさにトルストイ自身が解決を求め続けたものでもあった。いかに生きるべきか——この問いに自らの生き様で答えるという存在の仕方は、トルストイのものであり、クループスカヤのそれでもあった。

引き続き、クループスカヤがトルストイの作品に魅せられていった理由は、現存する社会制度に対する激しく鋭い批判であり、農民生活の活写であった。

トルストイは制度化したものをことごとく批判した。国家、身分社会、教会、教育などを徹底的に批判した。トルストイによる既存の社会や社会秩序に対するラディカルな批判に、多くの人々は溜飲をさげたことだろう。さきのクループスカヤもそうした人の一人であった。彼女は、日頃実際に見聞きする光景や体験に照らしてトルストイの指摘と見解的確さを検証し、「実生活を恐れずに直視することを学ぶのを助けてくれた」とトルストイに感謝している。

彼女は、トルストイが農民の目で現実を正確に描写し、批判している、と評価した。「トルストイは金持ちの贅沢と無為を非常に鋭く批判し、国家制度を批判し、すべてのことが地主と金持ちの満ち足りた心地よい生活をつくるために行われ、労働者は過重な労働のために身を滅

ぼして死んでいき、農民は仕事でへとへとになっていることを暴露していた。……私は自分の身のまわりで見たことをよく考え、トルストイが正しいことを知った」と彼女は記している。

トルストイ自身、オルロフが自分の好きな画家である理由を「その画の対象が——私の好きな対象だからである。その対象とは——ロシア国民、真のロシアの農民である」と「N.オルロフの画集『ロシアの農民』への序文」で語っている。これらの人々は「…従順で、勤勉で、キリスト教的で、柔和で、忍耐強い国民である」、と彼は農民を形容している。トルストイが「セミョーノフの農民小説への序文」において語った芸術作品の三つの判定基準のうちもっとも重要な「その対象に対する芸術家の態度がどれほど誠実であるか、つまり、描いているものを彼がどこまで信じているか」という基準を、彼自身、農民を描くことによって小説や民話の中で具体化したと思われる。もちろん、そのほか社会批評においてもこの基準は堅持されている。

それでも、トルストイの描く農民は、貴族の目から見た農民にすぎない、という指摘もある。そのようには言い切れない、と私は考えている。なぜなら、トルストイは、口碑叙事詩の放浪の歌い手を屋敷に泊め、民間伝説を聞き取ったり、ロシア・フォークロア学においてまことに大きな成果を残したアフナーシェフの民話集に学んだりして、民間伝承の世界に民衆の生き方、習慣あるいはかれらのこだわりを感じとっていたからである。口承、伝承の世界に、民衆が感じ、考え、活動する日常世界を垣間見、かれらがその過程に込めた意味を読み取ることによって、日常見聞きする農民の意識、こだわりを確認していたのではなかろうか。

だから、トルストイは、主人公の一人としての農民の描写よりも、農民層の共通の生活感覚や意識、その背景としての過酷な生活実態を描く上で卓越していた。もちろん、下層の民であることによって、さらには女であることによって虐げられ続ける一人の主人公を生き生きと描くことにも成功していないわけではない。例えば、『復活』のカチューシャである。ネフリュードフの道德臭が人間臭さを打ち消しているのに対して、彼女の強さも弱さも人間のそれそのものである。

トルストイの到達点は、「土地に生き、自分の日々の労働で暮らしをたてることは人間の幸福で独立した生活の主要な条件である」（「労働人民にむけて」）というものである。自分の労働で生きているかどうかによって、人間は大きく二つのグループに分けられることとなる。一つは、他の存在に依存して生きる人々で、貴族や地主や金持ちであり、既存社会でよりよく生きることを保障された層である。いま一つの層は、かれらのために身を粉にして働く人々で、農民であり職人である。これらの人々は、よりよく生きることを保障されていない、つまりはみでた存在だが、よりよく生きる人々が存在しなくても生きていけるという意味で、独立した人々である。

こうした考えは、ルソーの思想と共鳴するものである。現に、トルストイは自ら、自分に深い影響を与えたのは、ルソーと福音書である、と語っている。

トルストイは、やがて神の教えに従って生きることをすすめるようになるが、その神は既存の教会ではなく、福音書の戒律を意味していた。かれは、重い重い荷馬車を引くことから農民が自由になることを主張するが、その荷馬車とは、金持ち、官吏、地主、工場主、僧侶、僧正などを指している。つまり、「自分で働かないで、労働人民のおかげで生きているすべての人々」（「労働人民をいかに解放するか～農民への手紙～」）である。農民をこれら主人に繋ぎとめている装置が、人頭税、兵役、零細な土地、教会への寄進、工場などである、という（同上）。

かれによれば、こうした制度から自由になる方法が、「神の教えに生きることであり、財産をすべて共有し、一緒に労働し、働きによってではなく、必要に応じて分け合うようになることである」（同上）。そうすれば、かれらの間に富む者と貧しい者との区別がなくなる、とトルストイは指摘した。

トルストイは、「福音書に従い生きれば生活はよくなる」「ほかによりよく生きる方法はない」（同上）、と農民への手紙に記している。かれは、貴族でありながら、人間としての生き方にこだわるあまり、その枠から出ようとすることによってのみだしつつある存在としての自己と、おなじくはみでた存在としての農民——搾取され続ける存在でしかない農民——とを一括りにしようとしていた。その意味で、農民は分析され、解釈され、教え諭される対象ではない。対等な存在としてあった、とも言えよう。もちろん、無理はある。ヤースナヤ・ポリャーナの邸の食堂は貴族のそれだが、かれの書齋は簡素そのもので、壁にかけられた農民風のルバシカが気に入らない、といったアンバランスが、かれの生活と発想にはあった。無理があったからこそ、それを打ち消すように、激しい物言いになり、自己に厳しい行動の選択になったのかもしれない。

自己の労働によって、愛によって生きる素朴で忍耐づよいロシア農民の生き様を、あるいは職人家族の生き方を、かれは、民話の世界で展開した。トルストイは、制度化した機構を否定して、神の道に生きるしか、はみでた人間のよりよき生はないとしている。このようなトルストイを、ツァーリ社会も、教会権力も苦々しく思ったことは言うまでもない。

ところで、トルストイは、農民を理想化していたという指摘もあるが、承服しかねる。たしかに、農民を理想化しているきらいはあるが、そのままの農民をそっくり理想化していたわけではない。かれは、農民が近代化の餌食になる危険をはらんでいることも理解していた。トルストイは『イワンのばか』や『人は何で生きるか』の素朴な農民や職人の世界のなかに、『人にはどれほどの土地があるか』の私欲の世界が拡大していることを知っていた。不安定な岐路に農民が立っていることを感じていたので、福音書の教えに生きることを力説し、そうした農民によるいわばユートピア的社会の存在可能性を、カフカスなどの地域に言及しつつ、示唆している。

人間がどう生きるかが、第一の問題であったように、教育においても、子どもという存在に人間を見ることが前提であるという教育思想をトルストイは展開した。このことに感動したのが、クループスカヤであった。彼女には人格を認められない苦い生徒体験があったために、生徒に人間を認めるトルストイに率直に感謝の気持ちを捧げている。クループスカヤは、トルストイから、先に述べた現実批判の鋭いまなざしと勇気に加えて、いまひとつ、教育活動のすばらしさを学んでいる。

クループスカヤがトルストイの教育実践記録から読み取ったことは、子どもに人間を見ることが、子どもの人格の尊重が教育活動の前提だということであり、さらに、子どもの精神世界とその動き、共同作業の組織者としての教師、そして教育活動の目的としての人格と能力の成長と発達についての認識——であった。

クループスカヤは、授業づくりにおいて生徒たちもまた自由裁量の幅をもつような教師と生徒との関係、および生徒と生徒との関係、換言すれば、教授法とカリキュラムのあり様をトルストイから学び取っている。彼女がとくに注目した教育実践は、作文の授業であり、そこにおける教師と生徒たちとの共同作業の過程である。教師という仕事のすばらしさは「目の前で

のように子どもの諸力が成長し、発達するか、どのように子どもの人格が開花するかを見る」ことにあることが、トルストイの教育実践記録（「誰が誰のもとで書くことを学ぶのか、農民の子がわれわれにか、あるいはわれわれが農民の子にか」）から摂取されている。自らの教育実践によってクループスカヤは、「教育者を魅了するのは子どもの人格の全面的な開花である」ことを実感し、かれの言説の正しさを確認するが、この実感は、「子どもたちに平等に接し、子どもたちが何を語り、何を欲しているかに注意深く耳を傾ける」というトルストイの教育方法によって得られたものであった。自己目的としての、生徒における諸力の成長と発達という教育観もまた、トルストイから学んだものであった。

子どもに人間を見ることを原点とし、人格の発達を自己目的とするトルストイの教育観を実践で確認し、摂取したクループスカヤであるが、農民のまなざしで社会現実を直視する勇気もかれから学びながらも、トルストイの示す労働と自己完成の道を歩むことを途中で断念する。自己の活動の結果としての、社会そのものも変わるといふ過程が見えてこなかったことにあきたらず、彼女は、やがて、マルクス主義者への道を歩むこととなる。クループスカヤは、よりよき生を保障されることのないはみでた人々としての労働人民の自立をもとめる戦いを、教育活動によって援助しようとするようになっていく。

スヴァーリン文庫には、トルストイやトロツキーの手になるものをはじめ、ロシア・ソヴェト史の興味深い資料や貴重な初版本が含まれている。これらの文献は、全集などを読むのとはことなる感慨を覚えさせてくれる。それらは、当時の雰囲気伝えてくれているかのようだ。これらの文献や資料にふれ、生きられた思想を吟味する機会を是非ともふやしたいものだ、と思う。

（一橋大学社会学部教授）

## プリーストリのコモン・センス学派批判(1) — ビーティー批判 — Priestley's critique on the Common Sense School (1)

永井義雄  
NAGAI Yoshio

### (1)

プリーストリのコモン・センス学派批判の順序を替えて、ビーティー批判から検討する。

最初に「序文」に戻ると、プリーストリアは匿名のビーティー批判に触れて、この匿名批判にかなり同意すると述べている。この匿名書がどれであるかははっきりしない。だからプリーストリアの批判の前年に出た次の匿名書を最初に紹介するが、プリーストリアの言う匿名書と推定してのことであって、そうと断定しているわけではない。まずこのことをお断りしておく。推定の根拠は二つある。第一は、プリーストリア以前の（以後もだが）ビーティー批判はこれしか今のところ見当たらないことである。第二は、もしもマーガレット・フォーブズの言うところが正しくて、ビーティーの以下の書物に対しては二つの批判が現れただけであり、一つはロー博士のもの、もう一つはプリーストリアのものということであれば、この匿名書はそのうちの一つでしかもロー博士のものということになるということである。(cf. Margeret Forbes, *Beattie*